

農協の資料、聞き込みを中心に調査してみると、中郷では都市化に伴う工場化、宅地化とソサイの増大、蕎麦場ではコンニャク栽培などが比重大となって大きく登場してきた。がこの二部落でも養蚕の今後を真剣に考えており、急激に養蚕は衰えずという結論となった。三部落に共通することは養蚕の近代化をすすめるための将来の方針が大切だという点であつた。そこで三部落のまとめとして共同化、有畜養蚕、技術改良などの問題を検討した。

## 6. 結 論

前述した2の目的は自分なりにつかんだつもりであるが、1の目的が果されなかつたのは遺憾である。地域性の把握ということ自体抽象的であり、大変むずかしい問であろう。養蚕の現状調査にあたり、他の養蚕地帯との比較を行なつたなら、1の目的もある程度達成したのではないかと後悔は尽きない。

以上秩父養蚕業を調査し、それが今だに秩父の農業の中心となつていること、農業の近代化に伴い養蚕の共同化が唱えられていること、そして古くからの養蚕地帯である秩父にも工場化、宅地化などの現象が所によってみられることなど、様々な興味ある問題が姿を現わしており、それにとまどいながらも、改めてサワーの云う *Cultural landscape* の重要性、複雑性を悟つたわけである。

◇

◇

◇

内容的にはごく簡単に省略し、私なりの方法論中心にまとめてみた。方法論についての知識も浅く、かなり独断的になつたと思うが、御批判いただければ幸いである。

# 秩父盆地西北部の地形と土地利用

佐久間 治子

この報告は、上記の調査地域を地形と土地利用の面から考察し、地域の性格を把握する事を目的とした。しかし結果は満足出来るものとならなかつたが、可能な限りその目的遂行に努力したつもりである。

## 1. 概 説

調査地域は、埼玉県秩父盆地の西北部で、秩父郡小鹿野町、吉田町に属する。この盆地は、関東山地の中にあり、縦横13km内外のほぼ方形を示す。地形は、全体に東北に向つて低下し、海拔高度は出口付近で160m、1番高い三峰口で320mである。この盆地を荒川本流と、赤平川、吉田川、横瀬川等の支流河川が、盆地出口で一つになつて、峡谷を流下し、平野に達して

いる。この盆地の中を、南西から東北に向って連なる横瀬丘陵、尾田詩丘陵、吉田丘陵があり、その間に、三般の河岸段丘の平坦面が侵入している。この段丘は、盆地が陸化して後、数度の隆起運動によつて、前記の諸河川が形成したもので、調査地域に限ってみると、上位面は見られないが、赤平川及び吉田川の形成した二般段丘が見られ、その平坦面の最大面積を占めている。気候は、いわゆる盆地特有の気候型で、その特徴を、平野部の熊谷と比較して捉えてみた。気温の年較差は $24.3^{\circ}\text{C}$ で、熊谷のそれより $1.5^{\circ}\text{C}$ も大であり、月平均気温較差は、常に熊谷より大である。降水は山地性降水のあるためか平野部のそれよりわずかに多く、又特徴的なものには、夏の突発的な雷雨がある。風は一般に弱く、年平均風速 $0.9\text{m}$ となっている。降霜日数は、120日間で、5月の晩霜で霜害を受けることがある。地質は、秩父山地は古い木成岩から成り、大部分が古成層で、一部に中生層が入りこんでいる。又盆地内は才三紀層から成り、表層はその上を洪積層がおおい、更に諸河川によつて堆積した沖積層がおおっている。土壌はこれら基盤岩石の風化したものが多く、山地、丘陵地、段丘、共に *humus* の発達が悪い。

この地域は、古くから峠交通がさかんで、一時非常に栄えた時代があったが、道路の整備、鉄道の開通等によつて商圏が移動し、現在その名残りを止めるにすぎなくなっている。産業を見ると、農業の割合が圧倒的に多く吉田町では70%以上になっている。他に紡織業、製材業が特徴として挙げられる。人口は約2万4千人、密度は $128/\text{km}^2$ であり、昭和22年を頂点として、減少の傾向にある。

## 2. 本 論

地形は山地、丘陵地、段丘に三分される。面の分類では、段丘を台地と低地に分け、更に台地を中位段丘面、下位段丘面、段崖とし、低地を谷底平野、氾濫原、河道に細分した。これらの地形と土地利用の関係を概観すると調査地域の80%近くを占める山地及び丘陵地は、林地として利用され、残りの平坦面は、ほとんど耕地として利用されている。耕地面積の1割は水田で、残りの9割は、畑地及び樹園地であり、この地域の農業が畑作中心である事がわかる。地形面と土地利用形態との関係は下のようになる。

(図表次頁)

林地では、土性に影響を受けて、古生層山地は針葉樹が多く、丘陵地の才三紀層には、雑木の多いのが特徴である。集落はほとんど下位段丘上にあり道路に沿い、又山麓に密集している。水田も、下位段丘上に多く、二毛作田は少い。耕地の中で一番広い面積を占める普通畑は、従来からの米及雑穀に

土地利用形態		地形面
	集 落	丘陵地、中位段丘面、下位段丘面
	水田 <small>一毛作田 二毛作田</small>	下位段丘面、谷底平野面 氾濫原面 下位段丘面
	普 通 畑	山地、丘陵地、中位段丘面、下位段丘面 段丘崖
	桑 園	山地、丘陵地、中位段丘面、 下位段丘面、段丘崖
	その他の樹園	丘陵地
	林 地	山地、丘陵地、中位段丘面、 段丘崖

加わって最近では、牧草畑、きうり、いんげんのような園芸作物の畑が目立っている。桑園は耕地面積の30%前後を占め、段丘面のみならず、山地丘陵地の斜面にも見られ、幾種かの利用形態がある。従来から、この地域での最大の現金収入源となっている。最後にこの土地利用と密接な農業経営の面から考察を加え、ここが強力な消費市場から遠く、盆地という開かれた場所であり、地形面にも平坦面が少なく、そして生産性が低いということ、又気候条件、労働力の面、農民性の問題等、土地利用に大きな制約を与えているということが出来る。

## 印旛沼北部低地の地形と土地利用

### — デルタと輪中の例 —

相馬 伴子

論文の目的は、地域調査の基本である地形と土地利用を通じて、地域の性格を把握するものである。

調査地域は、千葉県北端で、北は利根川南は、印旛沼に接する利根川による沖積平野である。行政区界では、印旛郡本野村と、栄町の一部布兼である。成田線で上野より一時間半の全人口中八割が農業の農村である。

印旛沼は、北に唯一つの排水口をもち、利根川に注いでいるが、元来、利根川の遊水池の役割をになつてきたもので、本地域の逆デルタも利根川の氾